

資料編

天竜川上流で確認されている鳥類

天竜川上流の鳥類に関する文献

参考図書

用語解説

索引



天竜川で確認されている鳥類(天竜川上流部河川水辺の国勢調査より)

No.	目名	科名	種名	文献 聞取り	平成3年度 現地調査	平成7年度現地調査(地点)																
						1	2	3	4	5	6	7	8	9	10							
1	カイツブリ	カイツブリ	カイツブリ																			
2			カムリカイツブリ																			
3	ペリカン	ウ	カワウ																			
4	コウノトリ	サギ	ゴイサギ																			
5			ササゴイ																			
6			アマサギ																			
7			ダイサギ																			
8			チュウサギ																			
9			コサギ																			
10			アオサギ																			
11	カモ	カモ	コハクチョウ																			
12			オシドリ																			
13			マガモ																			
14			カルガモ																			
15			コガモ																			
16			トモエガモ																			
17			ヨシガモ																			
18			ヒドリガモ																			
19			オナガガモ																			
20			シマアジ																			
21			ホシハジロ																			
22			キンクロハジロ																			
23			スズガモ																			
24			ホオジロガモ																			
25			ミコアイサ																			
26			カワアイサ																			
27	タカ	タカ	ミサゴ																			
28			ハチクマ																			
29			トビ																			
30			オオタカ																			
31			ツミ																			
32			ハイタカ																			
33			ノスリ																			
34			サシバ																			
35			ハヤブサ	ハヤブサ	ハヤブサ																	
36					コチョウゲンボウ																	
37	チョウゲンボウ																					
38	キジ	キジ	コジュケイ																			

(種名の太字は本書の各論で扱っている種)

No.	目名	科名	種名	文献 聞取り	平成3年度 現地調査	平成7年度現地調査(地点)															
						1	2	3	4	5	6	7	8	9	10						
39	キジ	キジ	キジ																		
40	ツル	クイナ	ヒクイナ																		
41			パン																		
42	チドリ	セイタカシギ	セイタカシギ																		
43		チドリ	コチドリ																		
44			イカルチドリ																		
45			ムナグロ																		
46			ケリ																		
47			タゲリ																		
48		シギ	トウネン																		
49			ヒバリシギ																		
50	ハマシギ																				
51	クサシギ																				
52	タカブシギ																				
53	キアシシギ																				
54	イソシギ																				
55	ヤマシギ																				
56	タシギ																				
57	カモメ	ユリカモメ																			
58		セグロカモメ																			
59		ウミネコ																			
60		アジサシ																			
61		コアジサシ																			
62	ハト	ハト	キジバト																		
63			アオバト																		
64			ドバト																		
65	カッコウ	カッコウ	ジュウイチ																		
66			カッコウ																		
67			ツツドリ																		
68	フクロウ	フクロウ	アオバズク																		
69			フクロウ																		
70	ヨタカ	ヨタカ	ヨタカ																		
71	アマツバメ	アマツバメ	ハリオアマツバメ																		
72			アマツバメ																		
73	ブッポウソウ	カワセミ	ヤマセミ																		
74			アカショウビン																		
75			カワセミ																		
76		ブッポウソウ	ブッポウソウ																		
77	キツツキ	キツツキ	アオゲラ																		

(種名の太字は本書の各論で扱っている種)

No.	目名	科名	種名	文献 聞取り	平成3年度 現地調査	平成7年度現地調査(地点)															
						1	2	3	4	5	6	7	8	9	10						
78	キツツキ	キツツキ	アカゲラ																		
79			コゲラ																		
80	スズメ	ヤイロチョウ	ヤイロチョウ			(生息を確認)															
81		ヒバリ	ヒバリ																		
82		ツバメ	ツバメ																		
83			イワツバメ																		
84		セキレイ	キセキレイ																		
85			ハクセキレイ																		
86			セグロセキレイ																		
87			ピンズイ																		
88			タヒバリ																		
89		サンショウクイ	サンショウクイ																		
90		ヒヨドリ	ヒヨドリ																		
91		モズ	モズ																		
92			アカモズ																		
93		カワガラス	カワガラス																		
94	ミソサザイ	ミソサザイ																			
95	ヒタキ	ノゴマ																			
96		ルリビタキ																			
97		ジョウビタキ																			
98		ノビタキ																			
99		イソヒヨドリ																			
100		トラツグミ																			
101		ツグミ																			
102		ヤブサメ																			
103		ウグイス																			
104		コヨシキリ																			
105		オオヨシキリ																			
106		センダイムシクイ																			
107		ククイタダキ																			
108		セッカ																			
109	キビタキ																				
110	オオルリ																				
111	コサメビタキ																				
112	サンコウチョウ																				
113	エナガ	エナガ																			
114	シジュウカラ	コガラ																			
115		ヒガラ																			
116		ヤマガラ																			

(種名の太字は本書の各論で扱っている種)

No.	目 名	科 名	種 名	文献 聞取り	平成3年度 現地調査	平成7年度現地調査（地点）															
						1	2	3	4	5	6	7	8	9	10						
117	スズメ	シジュウカラ	シジュウカラ																		
118		メジロ	メジロ																		
119		ホオジロ	ホオジロ																		
120			コジュリン																		
121			ホオアカ																		
122			カシラダカ																		
123			ミヤマホオジロ																		
124			ノジコ																		
125			アオジ																		
126			オオジュリン																		
127			アトリ	アトリ																	
128				カワラヒワ																	
129		イスカ																			
130		ベニマシコ																			
131		イカル																			
132		シメ																			
133		カエデチョウ	ベニスズメ																		
134		ハタオリドリ	スズメ																		
135		ムクドリ	コムクドリ																		
136			ムクドリ																		
137	カラス	カケス																			
138		オナガ																			
139		ハシボソガラス																			
140		ハシブトガラス																			
確 認 種 数		140種	124	67	56	54	55	54	55	53	48	49	50	46							

（種名の太字は本書の各論で扱っている種）

- 調査地点
- 1.平岡橋～羽衣崎橋（113.7km～117.0km）
 - 2.為栗橋～南宮橋上（120.0km～124.0km）
 - 3.姑射橋～天竜橋（139.3km～142.0km）
 - 4.松川合流上～阿島橋（148.0km～151.0km）
 - 5.松川天竜橋～北島下島取水堰（162.0km～165.4km）
 - 6.中田切川合流～宮沢川合流（176.0km～179.0km）
 - 7.北の城橋～藤沢川合流（185.3km～188.0km）
 - 8.殿島橋～毛見橋（189.5km～192.5km）
 - 9.箕輪橋～深沢川合流（201.5km～205.0km）
 - 10.相合橋下～城前橋（209.3km～212.5km）

（ ）内は河口からの距離

天竜川上流の鳥類に関する文献(1)

No	編著者名 (発行年)	文献名(掲載紙名)	調査時期	調査対象範囲
1	信州鳥類生態 研究グループ (1977年)	長野県の野鳥 —繁殖期の鳥類群集について— (長野県)	1971年～1976年	長野県下
2	日本野鳥の会 長野支部 (1979年)	長野県鳥類目録 (日本野鳥の会長野支部)	1972年～1978年	長野県内全域
3	信州鳥類生態 研究グループ (1983年)	長野県下におけるカラスの集団時の分布と就 時個体数 (長野県下における特殊鳥類、長野県林務部)	1978年12月 ～1979年2月	長野県下
4	山田拓 (1979年)	伊那谷の鳥—その1 キセキレイは漂鳥か留 鳥か—(下伊那教育会 自然研究紀要 第2集)	1976年2月 ～1979年3月	天竜川とその支流
5	松村昭ほか (1980年)	上伊那の鳥類 (上伊那教育会 研究紀要 第1集)	1979年4月 ～11月	天竜川の三峰川合流 点ほか、上伊那地域
6	上伊那教育会 野鳥班 (1981年)	上伊那のコサギ・ゴイサギ—集団営巣地と 非繁殖期の集団時を中心に— (上伊那教育会 研究紀要 第2集)	1979年～1980年	上伊那地区の天竜 川ほか
7	下平洋雄 (1982年)	天竜峡の鳥類 (伊那路 第30巻 第6号、上伊那郷土研究会)	1965年～1969年、 1979年～1980年	飯田市付近の天竜峡
8	信州鳥類生態 研究グループ (1983年)	長野県下におけるトビの冬時の分布と就時個体数 (長野県下における特殊鳥類、長野県林務部)	1979年10月、 1980年1月	長野県下
9	羽田健三・ 清水義男 (1983年)	長野県下におけるマガモの繁殖地の分布と犀 川生坂ダム湖における繁殖状況 (長野県下における特殊鳥類、長野県林務部)	1978年5月、 1980年9月	生坂村犀川ダム湖 ほか、長野県下
10	伊那市史編纂 委員会 (1981年)	伊那市史 自然編 第五編 第2節 鳥 類の生態	1981年以前 の10年間	伊那市
11	信州鳥類生態 研究グループ (1983年)	長野県下におけるコサギの分布と繁殖状況 (長野県下における特殊鳥類、長野県林務部)	1980年5月、 1981年1月	長野県下
12	松村昭 (1982年)	天竜川水系の鳥類分布—コサギの分布と個 体数変動—(上伊那教育会 研究紀要 第3集)	1981年2月 ～1982年1月	辰野町平出～駒ヶ根市大 久保の天竜川とその周辺
13	大原均 (1982年)	下伊那地方のコサギの研究—非繁殖期の集 団時の現状—(伊那 第30巻 6号、伊那史学会)	1979年10月 ～1982年1月	下伊那郡下
14	信州鳥類生態 研究グループ (1983年)	長野県下におけるムクドリ(冬時の分布と就 時個体数 (長野県下における特殊鳥類、長野県林務部)	1981年12月 ～1982年1月	長野県下
15	羽田健三・ 三尾利彦 (1983年)	ゴイサギの長野県下における分布と就時行動 (長野県下における特殊鳥類、長野県林務部)	1981年3月 ～1982年3月	長野県下
16	松村昭 (1983年)	上伊那における野生鳥類の鳥相の変化 (信濃教育 第1165号 信濃教育会)	1983年以前	上伊那郡下

天竜川上流の鳥類に関する文献(2)

No.	編者著名 (発行年)	文 献 名(掲載紙名)	調査時期	調査対象範囲
17	下平洋雄 (1983年)	天竜川の鳥類—土曾川入口を中心に (伊那 第31巻 10号, 伊那史学会)	1983年以前	天竜川土曾川河口、 弁天橋～阿島橋
18	上伊那教育会 野鳥班 (1983年)	上伊那のカラスのぐぐらと就峙個体数について (上伊那教育会 研究紀要 第4集)	1982年12月 ～1983年1月	上伊那郡下
19	松村昭 (1983年)	中川村の野鳥 (上伊那教育会 研究紀要 第4集)	1982年6月 ～1983年1月	中川村、長谷村
20	清水義雄・ 羽田健三 (1986年)	マガモの繁殖と社会構造 (信濃教育 第1192号, 信濃教育会)	1970年～1985年	長野県下
21	平沢栄子・ 荒城由美 (1984年)	天竜川の野鳥 (上伊那教育会 教育紀要 第6集)	1984年9月 ～1985年1月	辰野町新樋橋～ 箕輪町北小河内の 天竜川
22	吉田保晴 (1986年)	河川に生息する鳥 (下伊那生物会誌 第19号)	1980年2月 ～1985年6月	天竜川 (阿南町～飯田市)
23	荒城由美 (1986年)	天竜川流域における野鳥—辰野南部について— (上伊那教育会 研究紀要 第7集)	1985年2月～9月	辰野町新樋橋～ 山際の天竜川とその周辺
24	山口登 (1987年)	伊那谷にカラスの群れを追って (伊那路 第31巻 第9号, 上伊那郷土研究会)	1986年以前	上伊那郡下
25	丸山栄 ほか (1987年)	天竜川周辺における鳥類の生息状況 (上伊那教育会 研究紀要 第8集)	1986年8月 ～1987年1月	上伊那郡下の天竜川
26	丸山栄 ほか (1988年)	天竜川の鳥類群集 (上伊那教育会 研究紀要 第9集)	1987年4月～8月	岡谷市釜口水門～ 静岡県境までの天竜川
27	辰野町誌編纂 専門委員会 (1989年)	辰野町誌 自然編 第Ⅱ章 鳥類	1980年～1988年	辰野町下
28	吉田保晴 (1989年)	崖に巣穴を造る清流の鳥(ヤマセミ・カワセミ) (伊那 第37巻 11号, 伊那史学会)	1986年7月 ～1988年3月	岡谷市釜口水門～ 天竜村鶯巣の天竜川
29	天竜川鳥類研究 グループ (1990年)	天竜川周辺における鳥類の生息状況とその 環境への影響 (長野県林務部)	1986年7月 ～1988年3月	岡谷市釜口水門～ 天竜村鶯巣の天竜川
30	飯島町誌編纂 委員会 (1990年)	飯島町誌 第4章 動物	1977年～1989年	飯島町の天竜川ほか
31	上伊那教育会 野鳥班 (1989年)	天竜川のカモ類の分布 (上伊那教育会 研究紀要 第10集)	1988年6月 ～1989年1月	辰野町城前橋 ～中川村の天竜川
32	塚田琢磨 (1990年)	上伊那地区の鳥類相 伊那市天竜川西岸 (上伊那教育会 研究紀要 第11集)	1989年	伊那市明神橋～ 伊那市新水神橋
33	吉田保晴 (1990年)	上伊那地区の鳥類相 飯島町(Ⅰ) (上伊那教育会 研究紀要 第11集)	1987年～1989年	飯島町の天竜川 (田切・日置利・本郷ほか)

天竜川上流の鳥類に関する文献(3)

№	編著者名 (発行年)	文 献 名(掲載紙名)	調査時期	調査対象範囲
34	細田文和 (1990年)	上伊那におけるサギ類の個体数変動 (上伊那教育会 研究紀要 第11集)	1980年5月～6月, 1990年8月	長野県下
35	福与佐智子 (1991年)	下伊那のオオサギーその1 天竜川における 出現状況一(下伊那生物会誌 第24号)	1988年2月 ～1990年12月	豊丘村万年橋～ 飯田市天竜峡の 天竜川とその周辺
36	戸谷省吾 (1991年)	天竜川を中心とした鳥類相(第1報) (上伊那教育会 研究紀要 第12集)	1990年3月～12月	伊那市～辰野町の 天竜川とその周辺
37	日本野鳥の会 長野支部 (1991年)	長野県鳥類目録2—100年の記録— (日本野鳥の会長野支部)	1979年～1991年	長野県下
38	桐生尊義 (1992年)	伊那谷におけるチョウゲンボウの繁殖地の分布と 分散についての考察(下伊那生物会誌 第25号)	1986年～1991年	長野県下
39	大原均 (1992年)	天竜川におけるコアジサシの繁殖状況 —短報1991年のコロニーを中心に— (下伊那生物会誌 第25号)	1991年5月	高森町の天竜川
40	戸谷省吾 (1993年)	天竜川を中心とした鳥類相(第Ⅱ報) (上伊那教育会 研究紀要 第14集)	1991年1月 ～1992年12月	伊那市～辰野町の 天竜川とその周辺
41	桐生尊義 (1992年)	飯田市川路地区の天竜川における鳥類の 生息状況(下伊那生物会誌 第25号)	1991年4月 ～1992年1月	飯田市川路の天竜川
42	桐生尊義 (1993年)	飯田松川における鳥類の生息状況 (下伊那生物会誌 第26号)	1991年6月 ～1992年12月	妙琴公園～天竜川合 流点付近までの松川
43	桐生尊義 (1993年)	下伊那で繁殖分布を拡大している鳥 (下伊那生物会誌 第26号)	1991年～1992年	下伊那郡下
44	原一彦 (1993年)	上伊那の鳥類相(駒ヶ根地区Ⅲ) (上伊那教育会 研究紀要 第14集)	1990年～1992年	駒ヶ根市
45	伊那谷自然教育会 (1993年)	中央アルプスと伊那谷の自然 (信濃毎日新聞社)	1993年以前	伊那谷 中央アルプス
46	小林高志 (1993年)	天竜川のカモ類 (上伊那教育会 研究紀要 第14集)	1992年12月 ～1993年1月	中川村天竜橋～ 伊那市水神橋の天竜川
47	細田文和 (1994年)	伊那東地区の鳥類相 (上伊那教育会 研究紀要 第15集)	1993年	伊那市の天竜川周辺
48	戸谷省吾 (1994年)	天竜川を中心とした鳥類(第3報) (上伊那教育会 研究紀要 第15集)	1992年12月 ～1993年11月	伊那市～辰野町の 天竜川とその周辺
49	小林高志 (1994年)	天竜川のカモ類Ⅱ (上伊那教育会 研究紀要 第15集)	1993年1月～12月	中川村天竜橋～ 伊那市水神橋の天竜川
50	上伊那教育会 野鳥班 (1995年)	上伊那の鳥類相(まとめ) (上伊那教育会 研究紀要 第16集)	1988年～1994年	上伊那郡下
51	(株)環境アセスメ ントセンター (1995年)	平成5年度 天竜川上流部河川水辺の国 勢調査業務委託 報告書(両生類・爬虫類・ 哺乳類) (建設省天竜川上流工事事務所)	1994年3月 ～1995年2月	天龍村～ 辰野町の天竜川

天竜川上流の鳥類に関する文献(4)

No.	編著者名 (発行年)	文 献 名(掲載紙名)	調査時期	調査対象範囲
52	戸谷省吾 (1996年)	天竜川水系の鳥 ヤマセミ・カワセミ (上伊那教育会 研究紀要 第17集)	1990年～1995年	上伊那郡下の天竜川とその支流
53	吉田保晴 (1996年)	天竜川水系の鳥 オオヨシキリ (上伊那教育会 研究紀要 第17集)	1994年～1995年	上伊那郡下の天竜川
54	小林高志 (1996年)	狩猟にともなうカモ類の変化 (上伊那教育会 研究紀要 第17集)	1995年11月	宮田村大久保ダム～伊那市水神橋の天竜川
55	吉田保晴 (1995年)	鳥から見た水辺環境 (建設省天竜川上流工事事務所伊那出張所)	1995年2月～12月	辰野町の天竜川
56	飯澤隆 (1996年)	天竜川水系の鳥 サギ類 (上伊那教育会 研究紀要 第17集)	1995年6月～1996年1月	伊那市～辰野町の天竜川

参考図書

鳥に関する図書は非常にたくさんあります。ここでは、野外で使える図鑑と、さらに詳しく調べたい人のために、専門的な本の一部を紹介します。

野外で使えるコンパクトな図鑑

『フィールドガイド日本の野鳥』高野伸二 著(1982年,(財)日本野鳥の会)
...日本で最も多くの人が使っている野外図鑑です。

『鳥630図鑑』(1988年,(財)日本鳥類保護連盟)
...帰化鳥や珍しい鳥も多く解説されています。

『自然ガイド とり』浜口哲一 著(1990年,文一総合出版)
...初心者向けにわかりやすくまとめられているほか、鳥の羽根や足跡など、他の図鑑ではあまり扱われていない情報も図解されています。また、観察記録の記入欄があり、自分だけの図鑑をつくれます。

写真や美しい絵がたくさん使われている図鑑

『山溪カラー名鑑 日本の野鳥』高野伸二 編(1985年,山と溪谷社)
...美しい写真がたくさん載っていて、見ただけで楽しくなる図鑑です。鳴き声や分布、繁殖に関する解説も充実しています。

『野鳥の図鑑』薮内正幸 著(1991年,福音館書店)
...鳥の絵の第一人者が描いたすばらしい鳥たちが、ページいっぱいに躍っている図鑑です。写真ではとらえにくい珍しい行動なども正確に表現されています。

専門的な図鑑、事典

『原色 日本野鳥生態図鑑<陸鳥編><水鳥編>』

中村登流・中村雅彦 共著(1995年,保育社)

...分布や採餌、繁殖に関する生態に絞って解説されています。最新の研究成果も知ることができます。

『図鑑 日本のワシタカ類』

森岡照明・叶内拓哉・川田隆・山形則男 共著(1995年,文一総合出版)

...ワシやタカ、ハヤブサの仲間だけを扱った専門的な図鑑です。オス、メス、年齢による羽色の違いや繁殖に関して非常に詳しい解説と、豊富な写真によって構成されています。

『野鳥の事典』清棲幸保 著(1966年,東京堂出版)

...初版が出版されてから30年以上経った今も、餌の種類に関する記述などが非常に詳しいため、資料として多くの研究者が利用しています。

『コンサイス鳥名事典』吉井正 監修(1988年,三省堂)

...世界中の鳥を名前から調べることができます。英文の論文などを読むときに便利な事典です。

『日本野鳥大鑑 鳴き声333上・下』蒲谷鶴彦 著(1996年,小学館)

...日本の野鳥333種の鳴き声のCD6枚と、図鑑がセットになっています。

雑誌

『BIRDER』(文一総合出版,月刊)

...BIRDER(バーダー)とは、バードウォッチャーとほぼ同じ意味ですが、より熱中してしまっているマニア的な人たちのことを指します。しかし、内容は決してマニアックなものに偏ることなく、鳥の生態や採鳥地に関する特集、珍しい鳥の情報、学術的な読み物、保護活動に関する情報などが掲載されています。

CD-ROM

『マルチメディア鳥類図鑑』柚木修 監修(1995年,アスキー)

『マルチメディア野鳥観察』松田道生 監修(1995年,アスキー)

『鳥日和 叶内拓哉写真集』叶内拓哉(1995年,SYNFOREST)

インターネットのホームページ

個人や団体によるたくさんのホームページがあります。ここではごく一部を紹介しますが、詳しくは、それぞれのページからのリンク集などをご覧になって下さい。

『NTT 自然とマルチメディア』(<http://www.wnn.or.jp/wnn-n/index.htm>)

『サントリー愛鳥キャンペーン 日本の野鳥』

(<http://suntory.dec-j.co.jp/culture/birds/welcome.html>)

鳥に関する普及活動、保護活動、研究などをおこなっている団体

以下に挙げた団体は、その活動の趣旨に賛同すれば基本的に誰でも入会できます。いずれも入会金や会費が必要になりますので、詳しい入会手続きについては直接お問い合わせ下さい。

(財)日本野鳥の会

〒150 東京都渋谷区南平台町15-8 ウッディ南平台ビル2階 会員センター
電話：03(3463)8842 FAX：03(3463)8844

1934年に野鳥愛護団体として文人や芸術家などが集まり発足しましたが、現在は全国に約5万人の会員を擁する日本最大の自然保護団体と言えます。海外のNGOとのネットワークも広がりつつあり、特にアジア全体の鳥類の研究、保護に力を入れています。機関誌「野鳥」を毎月発行しているほか、図鑑など数多くの出版物を刊行しています。

また、全国に支部があります。天竜川流域では諏訪支部、長野県内ではほかに長野支部、軽井沢支部があります。連絡先は、会員センターにお問い合わせ下さい。

信州野鳥の会

〒399-82 南安曇郡豊科町大字高家6495-58 西澤方
電話：0263(72)3923

松本平を中心に長野県内全域で活動しています。南信地域でも年に数回、探鳥会を開催しています。会報「はばたき」を毎月発行しています。

(財)日本鳥類保護連盟

〒150 東京都渋谷区宇田川町37-10-405
電話：03(3465)8601

愛鳥教育の普及を目指して、環境庁や文部省と共に全国の小中学校の鳥獣保護や研究活動を支える活動をしています。機関誌「私たちの自然」を毎月発行しているほか、数多くの出版物を刊行しています。

日本鳥学会

〒558 大阪市住吉区杉本町3-3-138 大阪市立大学理学部 動物社会学研究室気付
電話：06(605)2607 FAX：06(605)3172

日本の鳥類研究の先頭に立つ団体です。「日本鳥学会誌」を年4回発行するほか、図鑑などに使用される標準和名や分類の根拠となる「日本鳥類目録」を作成しています。学会というと、かた苦しいイメージが持たれがちですが、鳥類研究に関心のある人なら誰でも入会できます。

用語解説

越 冬：^{えっとう} 冬を越すこと。野生生物は気温が低く食糧が乏しい冬を様々な工夫を凝らして乗り切る。このため、秋の終わりから早春にかけての時期を特に越冬期と呼ぶことが多い。

河川敷：^{かせんじき} 堤防から対岸までの間の敷地。正確には、「河川法」によって定められた河川区域を指し、河川管理施設(水門など)の敷地も含む。

聞きなし：^き 鳥の鳴き声を人間の言葉に置きかえて表現すること。ウグイスの「^{ほう}法、^{ほけきょ}法華経(ホーホケキョ)」など。

擬 傷：^{ぎしょう} 巣やヒナへ外敵が接近すると、親鳥がけがをしたふりをして外敵の注意を自分に向け、巣やヒナから遠ざけようとする行動。地上に巣を造るチドリ類やカモ類に多く見られる。

高水敷：^{こうすいじき} 河川区域内の敷地で、増水したときにだけ水に被われる場所。

コロニー：集団繁殖地。天竜川ではサギ類、コアジサシ、イワツバメなどがコロニーを形成する。

採 餌：^{さいじ} 餌を探したり、採って食べること。

砂礫地：^{されきち} 植物のほとんど生えていない、砂や礫(石)に被われた場所。

樹 洞：^{じゅうどう} 大木の幹にできた割れ目状のあな。

狩 猟 鳥：^{しゅりょうちよう} 「鳥獣保護及び狩猟に関する法律」によって指定された狩猟の対象となる鳥。ただし、猟期及び狩猟の方法には厳しい制限があり、所定の手続きを経て許可を得た者でなければ、いかなる野鳥も捕獲できない。

す 巢：^す 卵を産み、ヒナを育てるための場所。ほとんどの鳥は、眠る場所と巣は異なり、巣は繁殖期の一時期しか使用されないことが多い。

巣 立 ち：^{すだち} ヒナが巣を離れて生活し始めるとき。普通、巣立ち後もしばらくの間は巣の周辺で親に餌をもらって生活する。この時期のヒナを、巣立ちヒナと呼ぶこともある。また、地上に営巣する鳥では、ほとんどが卵からかえった時点で体羽がはえ揃っており、数時間後には巣立つ。

成 鳥：^{せいちょう} 幼鳥期の羽色から変化して、それ以上、羽色に大きな変化(季節的な変化を除く)の無い年齢に成長した鳥。

托 卵：^{たくらん} 自分では巣を造らず、他の鳥の巣に卵を産み、ヒナを育ててもらうこと。日本ではカッコウ科の鳥が他の種へ托卵することが知られている。

つがい(番): 繁殖のためにカップルとなったオスとメス。

中^{なか}洲^す: 河道内に土砂が堆積してできた陸地で、流路によって河岸と隔てられているものや、流路の変動によって河道内に取り残された土地(寄洲)。中州とも書く。

ねぐら(埒): 眠る場所。鳥の場合、樹上や橋などの構造物のすき間のように、外敵に襲われにくい場所を選んでいる。

繁殖^{はんしよく}: つがい形成、営巣、抱卵、育雛^{いくすう}など、子孫を残すために行われる一連の行動。また、これらが行われる時期を繁殖期と呼ぶ。

非繁殖期^{ひはんしよくき}: 繁殖期終了後から次の繁殖期までの間の時期。一般に、秋から冬の間であることが多い。

ホバリング: 停空飛翔。羽ばたきながら空中にとどまる飛び方。

幼^{ようちよう}鳥: ヒナの体羽がはえそろい、1回目の換羽(羽根の抜け替わり)を終えるまでの期間。

ヨシ原^{はら}: イネ科の植物であるヨシの群落を指すが、広くはツルヨシなど近縁の植物群落、あるいはオギが混成した群落も指す。本書でも広い意味でヨシ原という語を用いた。

寄^{より}洲^す: 河道内に土砂が堆積してできた陸地で、河岸とつながっているもの(中洲)。寄州とも書く。

ラインセンサス法^{ほつ}:

調査地内に調査測線(ライン)を設定して一定速度で歩き、決められた範囲内に出現した鳥を記録する方法。一定の方法で調査することにより、異なる地域で調査した結果と、鳥類相や個体数を相対的に比較することができる。

流^{りゅう}域^{いき}: 地上に降った雨が地表や支川、あるいは地中を通して対象となる河川に集まる区域。天竜川では、八ヶ岳連峰、中央アルプス、南アルプスなどの稜線を境界として、天竜川に水が集まる区域を指す。

林^{りん}縁^{えん}: 森林の切れ目の部分。普通、林縁には森林内部と異なる特有の植物群落が見られる。鳥の中には、このような開けた場所と森林との境界付近に好んで生息するものもいる。

林^{りん}床^{しょう}: 森林内の地面付近。森林によって下草の種類や茂り方が異なり、その森林の特徴を示す重要な要素となる。鳥によっては、林床付近を好んで行動するものもいる。

索引

ア		カワガラス	89
アオサギ	34	カワセミ	71, 72
アオバズク	68	カワラヒワ	101
アカショウビン	70		
		キ	
イ		キアシシギ	57
イカルチドリ	53	キジ	50
イソシギ	58	キジバト	64
イワツバメ	80	キセキレイ	81
ウ		コ	
ウグイス	92	コアジサシ	61, 62
		ゴイサギ	29
エ		コガモ	38
エナガ	96	コゲラ	75
		コサギ	32, 33
オ		コジュケイ	49
オオタカ	44	コチドリ	52
オオヨシキリ	93, 94	コムクドリ	104
オオルリ	95		
オシドリ	35	サ	
オナガ	108	ササゴイ	30
オナガガモ	40		
		シ	
カ		シジュウカラ	97
カイツブリ	26	ジョウビタキ	90
カケス	106, 107		
カシラダカ	100	ス	
カッコウ	66, 67	スズメ	103
カルガモ	37		
カワアイサ	42	セ	
カワウ	27, 28	セグロセキレイ	85

タ
ダイサギ 31
タゲリ 55
タシギ 59
タヒバリ 86

チ
チョウゲンボウ 46, 47

ツ
ツグミ 91
ツバメ 79

ト
ドバト 65
トビ 43

ノ
ノスリ 45

ハ
ハクセキレイ 82, 83
ハシブトガラス 111, 112
ハシボソガラス 109, 110
ハマシギ 56
バン 51

ヒ
ヒドリガモ 39
ヒバリ 78
ヒヨドリ 87

フ
フッポウソウ 73, 74

ヘ
ベニマシコ 102

ホ
ホオジロ 99

マ
マガモ 36

ミ
ミコアイサ 41

ム
ムクドリ 105

メ
メジロ 98

モ
モズ 88

ヤ
ヤイロチョウ 76
ヤマセミ 69

ユ
ユリカモメ 60

おわりに

天竜川上流の自然環境は刻々と変化を続けています。それは太古の昔から繰り返されてきた自然の営みであり、人間の手による治水や利水の歴史でもあります。将来、天竜川上流はどのように変化していくのか、そして流域の社会や文化、自然環境とどんな関わりをもちつつ、21世紀を迎えるのか、無関心ではられません。本書が、鳥類とその生息環境の現状を把握するというを通して、そのような地域社会の関心を少しでも高められれば幸いです。

鳥は羽根を持つ、移動能力の極めて高い動物です。そして、餌場や営巣場、休息場など、それぞれの目的に応じてさまざまな環境を選びます。河川敷内でじっくりと鳥を見ていると、水の流れや植生、あるいは時刻や季節などの変化に応じて、実にたくさんの鳥たちが独自の利用の仕方をしているのに驚かされます。一般に、自然界の生物が減ると環境が悪化し、増えると改善されつつあると思われがちですが、急激な増減はいずれもあまり好ましいことではありません。生態系がバランス良く保たれているのが健全な自然環境と言えます。ただし、河川環境はもともと変化の激しいところです。鳥たちも環境の変化に応じて数が増減し、種の構成も変化します。一時的に数や種に変化が見られたとして、それがはたして人為的な環境の改変によるものなのか、あるいは自然の営みの一部なのか、判断するのは容易ではありません。ひとつ言えることは、現状をできるだけ正確に把握し、それを蓄積することが、的確な判断をするための材料になるということです。

天竜川の河川敷は、年間を通して多くの方が訪れます。近年のアウトドアブームも影響して、その数は年々増えているように思えます。たとえば、釣り、水遊び、バーベキュー、カヌー、舟下りといったレジャーを楽しむ人たちや、犬の散歩、ウォーキングなど川を日常生活の一部に取り入れている人たちもいます。「野鳥観察を楽しむ人」も、そんな中の1つのタイプとして確実に増えています。

川はみんなのもので、これらの人たちには平等に川を楽しむ権利があるはずですが、しかし、私たちの楽しむ権利は、そこに存在し機能している生態系がバランス良く保たれて、はじめて得られるものだということも知っておかなければなりません。このようなことから、本書が、野鳥に興味のある人だけでなく、なるべく多くの人たちに読んでもらえることを願っています。

最後に、本書の作成にあたり、多くの方々のご協力を頂きました。大原均氏にはご多忙の中、現地調査から執筆、監修に至るまでご指導いただきました。戸谷省吾氏、山上信雄氏、松村昭氏、丸山隆氏、腰原正己氏、小口妙子氏、植松永至氏には貴重な写真を快くご提供いただきました。吉田保晴氏、桐生尊義氏には興味深い研究成果のエッセンスをわかりやすくまとめていただきました。藤原直子氏、水上貴博氏、中垣明子氏には原稿作成や校正作業にご協力いただきました。また、天竜川で鳥類研究に携わった多くの方々の研究の蓄積によって、本書の内容を充実させることができました。ここに厚くお礼申し上げます。